

前三七五年の平和

中井 義明

はじめに

アリユゼイアの海戦直後に結ばれた平和は短期間で破綻したために「アンタルキダスの平和」ほど注目されることはなかった。しかし、アテーナイではこの平和を記念して平和の祭壇が建立され、平和の祭典が創設されている。また、平和に含まれる外国に駐屯している部隊の撤兵条項は結果としてアテーナイの強大化の一助となった。平和の背景にあるアテーナイに対するアテーナイの不満と不信がレウクトラ以降のスパルタへの接近の伏線となっている。

このように本稿が対象としている平和は前四世紀ギリシア国際政治史の大きな里程標であると評価できよう。本稿では平和に至る政治過程、締結時期及び誰が平和を構築したのか、さらにはアテーナイの不参加を中心に平和の性格について検討される。

前史

アテーナイ民主派によるクーデタに端を発したポイオーティア戦争はスフォドリアス事件を契機にアテーナイをも巻き込み、戦場はポイオーティアのみならず、エーゲ海からイオニア海にまで拡大していった。戦争は前三七六年後半から翌年の前半にかけて急変し、ポイオーティアにお

ける戦況の悪化、ナクソスの海戦、テギュラの戦い、アリユゼイアの海戦、アテーナイ・スパルタ双方のフォーキス遠征と続く。

これらはスパルタによる戦略転換の産物であった。ポイオーティア戦争勃発以来、スパルタはポイオーティアに侵攻してアテーナイに圧力を掛けるという直接アプローチによる戦略をとってきた^①。しかし、アゲーシラーオスが病のために作戦指揮が取れなくなって以降、スパルタはその戦略を大きく転換する。陸路直接ポイオーティアへ侵攻するよりも、アテーナイの海上交通線を遮断していく間接アプローチに転換する^②。

スパルタはアテーナイを海上から封鎖するという目的を達成出来なかった。ナクソス^③。続いてアリユゼイアでの敗北^④。テギュラでの敗北とアテーナイの勢力拡大^⑤。これらはスパルタの新戦略が成功していないことを物語っている。しかし、スパルタは相次ぐ敗戦にもかかわらず洋上になお有力な艦隊を擁しており、アテーナイは相当規模の艦隊を展開し続けなければならなかった^⑦。それはアテーナイの財政を逼迫させることとなり、ティモテオスは資金不足とも戦わねばならなかった^⑧。

スパルタの戦争努力は一層高められていく。アリユゼイアに敗れた艦隊をスパルタはコリントス湾に後退させ、フォーキスへのクレオンプロトス遠征軍の海路移送を警護する任務に当たらせている^⑨。ポイオーティアにスパルタは、一時期、本国軍の二分の一、三個モラーの部隊をテストパイとオルコメノス、更にタナグラに配備し、アテーナイからの攻勢に

対する盾と槍の役割を担わせたのである。¹⁰⁾

平和締結の時期

平和が締結された時期について、ハミルトンを除いて研究者の見解は大きくは前三七五年秋から翌年の秋までの時期に分かれている。¹¹⁾

時期を想定する手がかりは幾つかある。まずテキュラの戦いが前三七五年初春と想定され、次いでアリユゼイア¹²⁾の海戦が前三七五年六月末ころと伝えられている。アテーナイが平和の締結を祝してシユノイキア祭¹³⁾にエイレーネー祭を併設し、毎年ヘカトンバイオーン月の一六日に祝祭を挙行していたこと。碑文からは前三七五年八月末ごろにアテーナイがケルキュラと攻守同盟を結び、第二アテーナイ海上同盟にケルキュラ、アカルナニアを迎え入れたことが分かる。¹⁴⁾

エイレーネーの祭典はアリストファネスの『平和』一〇一九行目の古註によるとヘカトンバイオーン月の一六日に挙行された。¹⁵⁾ イソクラテスやネポスによると、アテーナイ人は前三七五年の平和を記念してエイレーネーへの祝祭を創設したという。¹⁶⁾ そのエイレーネー祭について、アリストファネスの『平和』の古註は毎年ヘカトンバイオーン月の一六日に挙行されたという。従って、平和はヒッポダモスがアルコンの年のヘカトンバイオーン月の一六日、即ち前三七五年の七月末ないしは八月の初めに締結された事になる。

アテーナイ人がエイレーネーの祭典を挙行したヘカトンバイオーン月はアテーナイの暦では第一月であり、グレゴリウス暦では七／八月に相当する。しかし何故か研究者は平和の締結をひと月以上ずらせて前三七五年秋から翌年の秋と想定するのである。その理由の一つはケルキュラ等のイオニア海諸都市の海上同盟加盟はアリユゼイアの海戦を含む前年

度のテイモテオスの活動の結果であり、平和条約締結以前とすることに求められる。

しかし、クセノフォンもディオドロスもムナシッポスの遠征の時点でケルキュラがアテーナイの同盟国であったと想定させる証拠を提示していない。むしろケルキュラがアテーナイと同盟を締結するに至ったのはムナシッポスの遠征と強く関係があることを示しているのである。何故なら、ケルキュラへの遠征を決定したスパルタも、アテーナイに援軍派遣を求めたケルキュラの使節もケルキュラがアテーナイの同盟国であるという「事実」にまったく触れず、相手側の掌中にケルキュラが入ることの不利益、ケルキュラを味方につけることの利益が強調されているからである。

確かにディオドロスはアリユゼイアの海戦までにテイモテオスがケファレニア、次いでアカルナニアを同盟に引き込んだことに言及しているが、ケルキュラが同盟国であったとは言及していない。¹⁷⁾ ポリュアイノスはケルキュラがアリユゼイアの海戦までにアテーナイの同盟国となったと伝え、¹⁸⁾ ネポスはケルキュラがアリユゼイアの海戦の後にエーペイロスやアタマニア、カオニアなどと共にアテーナイの同盟者となったと伝えて¹⁹⁾いる。

しかし平和以前にケルキュラがアテーナイの同盟国となったという見解はクセノフォンやディオドロスと整合性がないばかりでなく、碑文資料との整合性も見られない。ケルキュラ・アカルナニア・ケファレニアとの同盟決議碑文は同盟の成立がヒッポダモスのアルコンの年の第二プリユタネイア、即ち前三七五年の八月から九月にかけての時期に属することを示している。²⁰⁾

ムナシッポスの遠征はその前、平和条約の締結は更にその前となる。時期のはっきりしている史料を基に論ずれば、平和条約の締結は前三七

五年六月末／七月初めのアリユゼイアの海戦のあと、前三七五年八月／九月のケルキュラ、アカルナニア、ケファレニアとアテーナイとの同盟条約締結以前のこととなる。従って、平和条約が締結されたのは前三七五年七月末／八月初めということになる。

平和を構築したのは誰か

クセノフォンからはこの平和がスパルタとアテーナイとの二国間の平和条約であるという印象を強く残すが、ディオドロスはこれが『アンタルキダスの平和』に続く第二のコイネー・エイレーネー、共通平和だと明言している。イソクラテスは「*tēs koinēs eleutherias* (共通の自由)」という言葉を使うことによってこの平和が共通平和だということを示している。²²しかしそのイソクラテスは平和条約締結に至る過程の中のペルシア王の関与を全面否定している。²³そしてクセノフォンはペルシアの関与については沈黙している。²⁴

ライダーはこの平和が共通平和であり、「大王の平和」の更新でしかない²⁵と断言する。その理由はイソクラテスが『プラタイア人』の中でこの平和以外に言及していないこと、ペルシア王が平和へのイニシアティブを握ったこと、フィロコロスを引用するディデュモスの記事に平和の祭壇その他の祭典を「王からの平和」と結び付けていることである。²⁶

前三七五年の平和が共通平和であったとするならペルシア王の関与を否定するのは困難である。しかし平和への過程がペルシア王の命令から始まったとするのは『アンタルキダスの平和』の前例や前三六六年の平和の事例から判断して不自然な印象が残る。ギリシア人側からの働きかけがなければならぬ。

さらに共通平和の締結には二国間の平和条約締結以上の時間を必要と

する。共通平和はその始動から調印・誓約まで少なくとも半年以上の時間を考えねばならない。というのは使節のギリシアとスーサとの往復、スーサでのペルシアとの交渉、その中でギリシアでの平和会議を誰が主催し締結される平和のプロスタテスとなるのかのペルシア側の承認及びギリシア諸国に対する王の勅書の開示がその過程に含まれるからである。

シーガーは平和への始動は前年のナクソスの海戦直後に始まっていたとする事で解決しようとする。²⁷イニシアティブを握ったのはスパルタであり、冬を通してペルシアと交渉を重ねたと推測するのである。しかしスパルタによるペルシアとの事前交渉は史料にない推測であり、この推測を基に議論を組み立てるのは困難である。それ以上に問題なのは共通平和であることを確信させる証拠がないことである。ペルシア王の勅書がどの国に当てられ、どの国が会議を主催し平和の実行と保障をするのが伝えられていないことである。つまり共通平和のための平和会議の準備段階というものが史料に全く残されていない。以上の点を勘案すると前三七五年の平和はスパルタとその同盟諸国及びアテーナイとその同盟諸国との間の平和であるというカートリッジの指摘も肯ける。²⁸

問題は同時代人であり、スパルタの最高首脳達と親しい関係にあったクセノフォンの記述が余りにも簡略に過ぎるといふことにある。アリユゼイアの海戦の後、優勢に立ったアテーナイが突然スパルタに講和を求めてくるのである。アテーナイが講和を求めた理由については詳しく紹介しているが、それを受けて講和に同意したスパルタ側の事情については全く沈黙している。アテーナイが十分な準備を事前に行い、スパルタとの講和が成立すれば直ちにスパルタに赴いた使節団の中からイオニア海で作戦行動中のティモテオスに平和の成立と艦隊の撤退を伝える使節の派遣を決めていたのである。これに対してスパルタがどのような働き

かけを行なったのか、アテーナイの申し入れに対してどのような対応したかが伝えられていない。

その結果、前三七五年の平和がスパルタとアテーナイ二国間の講和条約であるという印象を強く受けるのである。後世の史料ではあるがディオドロスとフィロコロスの断片は共通する点が多く、クセノフォンを優先してこれら後世の指摘を無視することは難しい。アテーナイがアンタルキダスの平和に良く似たベルシア王の平和を歓迎し、傭兵の雇用のためと戦争に疲弊していたので戦争を終わらせ、平和の祭壇を建立した、と述べるフィロコロスを排除することは出来ない。

ベルシア王がギリシアにおける平和を求める使節を差し向けるのは平和への過程全体の途中段階である。ディオドロスが *presbeis exepempen eis tēn Hellada* (使節をギリシアの地に派遣した) と複数の使節がギリシアに派遣されたと述べていることに注目したい。これはベルシアが複数の主要なギリシア諸都市に平和の再構築を訴える使節を派遣したことを意味している。このディオドロスの記事をクセノフォンの記事に重ねると次のように平和への過程を再構築できる。

ベルシアが派遣した使節の訪問先にアテーナイも含まれており、終戦を命じるペルシア王の命令をアテーナイは歓迎し、同じくペルシア王の使節の訪問を受け、「アンタルキダスの平和」と同じく平和会議の主催と平和の擁護を求められたスパルタを新たな共通平和へと促すために使節団を派遣したものと思われる。問題はペルシア王をしてこのような行動を取らせたのは誰なのか、ということである。

ここから先は全くの推測にならざるを得ない。スパルタが前年のナクソスの海戦のあとギリシアにおける戦争を終わらせる為に使節をペルシアに派遣して平和への過程を始めたというコークウェルやシーガールの推測は魅力的である。推測に推測を重ねることになるが私はこれを推進し

たのがライスなどが推測するようにアンタルキダスではないかと考えている。

前年度における海洋戦略への転換。アテーナイの海上交通線を脅かすことによる講和への誘導。ペルシア王を利用した平和会議の招集。これらはアンタルキダスの平和に至る過程と極めて類似している。ペルシア王を動かすにはアンタルキダスとペルシア王との個人的な信頼関係が重要である。アンタルキダスはアリオバルザネスのクセノス(賓客)であり、アルタクセルクセス王の友人かつ賓客であった。

アテーナイを海上での消耗戦に引き込んでいった前三七六／五年の戦略は前三八八／七年のアンタルキダスのそれに類似している。それにアリゼイア海戦時のノウアルコスがかつてアンタルキダスの副官を務めたニコロスであったことに注目すれば、海洋戦略のグラント・デザインを描いたのはアンタルキダスであると想定するのは不合理ではない。彼自身が前三七五年の平和に関連して自らペルシアに赴いたかどうかは分からない。その必要はなかったのかも知れない。

平和へのテーバイの不参加

平和条約に含まれるアウトノミア条項をめぐってアテーナイのカッリストラトスとテーバイのエパメイノダスが論争し、テーバイが平和条約締結を拒んだとディオドロスが伝える逸話について、これは前三七一年の平和の際にスパルタのアゲーシラーオスとテーバイのエパメイノダスが論争し、テーバイが平和条約の調印を拒んだという逸話を混同しているという説が有力である。テーバイが海上同盟に留まり、ティモテオスに協力していることから、またアテーナイによる平和条約排除 *ekspoudous* の決議に直面してテーバイが妥協したというインクラテス

の記述から、^{④①} テーバイは前三七五年の平和条約を調印し、このときの共通平和の枠組みの中に参加していたと言うのである。

イソクラテスの記述はオーローポスをめぐるテーバイとアテーナイの係争を問題としている。したがってこの記述からテーバイが平和条約を受け入れたと判断することは出来ない。^{④②} デイオドロスが伝える論争はテーバイの中においても、海上同盟総会においても、そして平和会議においても戦われたが、結局スパルタの圧力に屈したとスタイリアヌーはみなしている。^{④③} しかし、これは以下で述べる新たな矛盾を生み出すこととなる。勿論、デイオドロスの記述を事実とし、テーバイが平和条約の調印を拒んだと主張する説もある。^{④④}

テーバイはボイオーティア戦争を通じてテーバイが主導権を握るボイオーティア連合の構築を目指しており、逸話として伝えられるカツリストラトスやアゲーシラーオスとエパメイノンダスの論争はボイオーティア諸都市へのアウトノミア条項の適用をめぐるものであった。もしテーバイが前三七五年の平和の折にはボイオーティア諸都市のアウトノミアを承認し、前三七一年には否定するような発言をしたとするなら、明らかにテーバイの外交には首尾一貫性が欠けている。私はこの論争そのものはエパメイノンダス神話の一つであり、後世の創作と考えている。

もしスタイリアヌーが考えているようにアウトノミア条項のボイオーティア適用をめぐるテーバイ内部で論争されたとするなら、テーバイの使節に選ばれるエパメイノンダスは平和条約批准拒否の立場を貫いたのかそれとも受諾を市民に迫ったのが問題となる。エパメイノンダスが拒否の立場に固執すればテーバイは平和条約遵守の誓約を拒否したであろうし、受諾を迫ったのであれば平和会議の席での論争は起こりえなかったであろう。更に言えば、前三七一年の平和会議でいったんテーバ

イ代表がボイオーティア諸都市の都市毎の誓約を承認しておきながら、その翌日にボイオーティアの名前での誓約変更を求めたのはテーバイ使節団の重大な失敗であり、そのようなミスのエパメイノンダスが犯したのだということをこれらの逸話は伝えることになる。^{④⑤} これは考えられない。

平和条約の調印と遵守の宣誓拒否が平和の枠組みそのものからテーバイは除外されてしまうのだろうか。ましてや同盟主の意向に逆らった同盟国は海上同盟から自動的に除名されてしまうのだろうか。

一つの手掛かりをペロポネソス戦争期に求めることができる。ニキアスの平和のときにテーバイ（あるいはボイオーティア）は平和条約には調印せず、アテーナイと休戦協定を結ぶことによつて全体として平和の枠組みの中に参加し、平和条約調印を強力に進めるスパルタとの同盟を維持している。

それにテーバイが同盟主の意向に反して平和条約に加わらなかったのは珍しいことではない。平和条約の中のアウトノミア条項にテーバイが反対した例は他にも見られる。前三八六年の「アンタルキダスの平和」の際にもテーバイはボイオーティアを代表しての誓約を主張し、これが認められないと条約への不参加を表明している。^{④⑥} このときはアゲーシラーオスとの間に論争が生じている。^{④⑦}

ニキアスの平和の時にはテーバイが主導するボイオーティアは平和条約そのものには加わらず、アテーナイとの間に十日ごとに更新される休戦協定 (*ekechiria deheneros*) を結んでいる。^{④⑧} さらにコリントスやマクドニア、エーリスも誓約を行っていない。^{④⑨} それにもかかわらずこれら諸国はニキアスの平和の枠組みの中に組み込まれており、ペロポネソス同盟からも排除されていない。^{⑤①} 実際トゥキュディデスは *ton xymmachôn hosoi oud' autoi edexanto tas spondas* (条約誓約を受け入

れなかった同盟諸国」という語句を使って、スパルタの政策にあからさまに反抗している同盟国が存在していることを証言している。ペロポネッス同盟よりも同盟国に対する統制の緩やかな海上同盟にそのような同盟国が存在し得ないのだろうか。

いわゆる『アリストテレスの決議碑文』には共同の防衛協力義務を除いて同盟諸国の遵守すべき義務規定は含まれていない^⑤。これはアテーナイがケルキュラと結んだ同盟条約にも、ケルキュラ、アカルナニア、ケファレニアを海上同盟に迎え入れる条約にも、パロスとの同盟条約にも同盟諸国が同盟総会の決議を遵守しなければならないという規定を見出すことは出来ない。碑文が不完全であるという点を認めるとしても、また碑文がアテーナイの公文書館に保管される条約正文ではないとしても、アテーナイと海上同盟総会が承認・決定した平和条約の誓約を拒否することがアテーバイを海上同盟から除名する理由となるのか、私には疑問である。

従って、アテーバイが前三七五年の平和の後も海上同盟に留まっていることから、アテーバイがポイオーティア諸都市のアウトノミアをめぐるカッリストラトスと論争した挙句平和条約誓約に同意したと解釈することに私は反対である。アテーバイは平和条約の誓約を拒否しそれに参加しなかったが、平和条約が作り出した平和の枠組みの中に組み込まれていたと解釈できるのではないか。

もしアテーバイが平和の枠組みから完全に外れてしまったならばスパルタはポイオーティアにおける同盟諸都市の安全保障の立場から外国軍隊の撤退規定の例外を主張したであろう。アテーバイの平和への不参加を口実にテスピアイやオルコメノス、タナグラに置かれている守備隊の撤退拒否やフォークシスに展開しているクレオンプロトス軍のポイオーティア侵攻すらスパルタは行い得たであろう。

おわりに

アテーナイが平和の祭壇まで築いて歓迎した前三七五年の平和は短期間 (*chronon oligon*) で崩壊する。ディオドロスが「なぜなら両都市自身は短期の間条約を固く遵守したが、その後親しくしている諸都市と協力して戦争を起し、更にまた約定を結んだ共通平和に心を掛けることはなかったからである」と指摘しているように、アテーナイが民主派を、スパルタが寡頭派を支持し、党争に揺れているザキュントスやケルキュラに介入したことが平和を崩壊へと至らしめたのである。

崩壊の時期について、クセノフォンからは極めて短期間の内に平和が崩壊してしまったと考えられるし、ディオドロスからは前三七四／三年度に崩壊してしまったと考えられる。ペロッホ以降、研究者たちは、テイモテオスが前三七三年の晩春にはケルキュラに向け出撃準備を整えていたと証言するデーモステネースを根拠に、平和の破綻を前三七三年秋に置いている^⑥。しかし、碑文は前三七三年説を支持していない。IG II² 96は、二行目から三行目にかけて [E]pi Hippodamantos, epi tēs Antiochidos di/leulteras ptytanleiasとあり、ケルキュラがアカルナニアやケファレニアと共に前三七五年八月から九月にかけての時期に海上同盟に加入したことを記している^⑦。ケルキュラの同盟加入がムナシッポスの遠征の結果だとするなら、平和の崩壊は前三七五年八月／九月より以前のこととなる。

平和はその締結後ひと月足らずの内に崩壊し、前三七一年のレウクトラに向かって歴史は進んでいく。

注

- ① Xen. *Hell.* 5. 4. 14-16: 前三七九年冬(クレオンプロトス)。Cf. *Diod.* 15. 27. 3.
 Xen. *Hell.* 5. 4. 35-41: 前三七八年(アゲーシラーオス)。Cf. *Diod.* 15. 32. 1-33. 3.
 Xen. *Hell.* 5. 4. 47-55: 前三七七年(アゲーシラーオス)。Cf. *Diod.* 15. 34. 1-2.
 ② Xen. *Hell.* 5. 4. 56 (対テーバイ), 61 (対アテーナイ)。ディオドローロスは第二アテーナイ海上同盟の成立に対抗する為にスパルタが対同盟政策を転換したと指摘する。Diod. 15. 31. 1-2.
 ③ Xen. *Hell.* 5. 4. 61; *Diod.* 15. 34. 4-6.
 ④ Xen. *Hell.* 5. 4. 65; *Diod.* 15. 36. 5-6.
 ⑤ Xen. *Hell.* 6. 1. 1; *Diod.* 15. 37. 1-2; *Plut. Pelop.* 16f.
 ⑥ Xen. *Hell.* 5. 4. 66.
 ⑦ *Diod.* 15. 34. 5 (ナクソスにおけるカブリアスの艦隊は八十三隻)・Xen. *Hell.* 5. 4. 66 (イオニア海に展開しているティモテオスの艦隊は七十隻以上); *Isoc.* 15. 109 (イオニア海に向けペイライエウスに集結したティモテオス艦隊は五十隻)。
 ⑧ Xen. *Hell.* 5. 4. 66: クセノフォンは資金に窮したティモテオスがアテーナイ本国に戦費の追加補給を請求し続けたことを伝えている。Dem. 49: デーモステネスによると、国家が支給する遠征資金は十分ではなく、ティモテオスは遠征に参加する兵士や同盟軍であるポイオーティア艦隊への給与を確保する為に原告(アポッロドロス)の父から借金し、自らの財産を抵当に入れなければならなかった。その返済を求めて彼は訴えられたのである。Isoc. 15. 109: インクラテスはティモテオスが国家から受けた遠征資金が僅か十三タラントンに過ぎなかったと言った。Ps-Arist. *Oec.* 1350a31f: 兵士らから給与の支払いを要求され、資金と食糧の遅れを嵐のせいにして言逃れる。
- ⑨ Xen. *Hell.* 5. 4. 60: eis *Thebas strateuma diabibazein, ei men boulointo, epi Phōkeōn, ei de boulointo, epi Kreusios*
 ⑩ テスピアイにはポイオーティア戦争の当初からハルモステスと相当規

模の守備隊が設置されていた。スフォドリアスはクレオンプロトスの遠征軍の三分の一を任せられたし(Xen. *Hell.* 5. 4. 15)、フォイビダスの戦死後ポレマルロスと一個モラーのスパルタ軍を守備隊として派遣されている(Xen. *Hell.* 5. 4. 46)。インクラテスはテスピアイに大規模な軍勢が駐屯していたことを指摘している(Isoc. 14. 13)。オルコメノスにも相当数の部隊が設置されテーバイに対する攻撃に使用された。オルコメノスに配備されていた部隊が二個モラーの規模であったことをプルタルコスが伝えている(Plut. *Pelop.* 16)。タナグラ(Plut. *Pelop.* 15)。オレオス(Xen. *Hell.* 5. 4. 56)。

- ⑪ C. D. Hamilton, *Agessilaus and the Failure of Spartan Hegemony*, Ithaca/London, 1991: 192. 平和条約締結の時期についての研究者達の説は J. Buckler, "Dating the Peace of 375/4 B.C.", *GRBS*, 12 (1971): 353 n.4.
 ⑫ Schol. *Aristoph. Eirene*, 1019; *Isoc.* 15. 109-110; *Nep. Timoth.* 2. 2-3.
 ⑬ *IG II² 97=Tod 127.*
 ⑭ *IG II² 96=Tod 126* 碑文では「コルクュラ」。以下「ケルクュラ」に統一表記。
 ⑮ Schol. *Aristoph. Eirene*, 1019: phasi gar tēi tōn synoikesiōn heortēi thysian teleisthai Eirēnēi, ton de bōmon mē haimatousthai, Hekatombaionos ménos hektēi epi deka.
 ⑯ *Isoc.* 15. 109-10; *Nep. Timoth.* 2. 2-3.
 ⑰ *Diod.* 15. 36. 5.
 ⑱ *Polyaen.* 3. 10. 16.
 ⑲ *Nepos*, 13. 2. 1.
 ⑳ P. J. Rhodes & R. Osborne, *Greek Historical Inscriptions 404-323 BC*, Oxford/ New York, 2003, n.24. II.2-3: [e]pi Hippodamantōs archontes epi tes Antiochidos deulteras prytanleias: コッポダモスが[アルコンの]に; アンティオキス族が第二回プリユタネ[イス]であったこと;
 ㉑ *Diod.* 15. 38. 1. cf. T. T. B. Ryder, *Koine Eirene: General Peace and Local Independence in Ancient Greece*, London/ New York/ Toronto,

- 1965: 61. トイターは前三七五年の平和は共通平和だと断言する。
- ②⑦ Isoc. 14. 5: hōst' eirēnēs ousēs kai synthēkōn gegēmenōn ouch hopōs tēs koinēs eleutherias metechomen
- ②⑧ Isoc. 14. 41.
- ②⑨ Xen. *Hell.* 6. 2. 1.
- ②⑩ Ryder, 1965: 59.
- ②⑪ Philochoros 328F151. Ryder, 1965: 124-5.
- ②⑫ R. Seager, "The King's Peace and the Second Athenian Confederacy", *CAH* 6, Cambridge 1994: 175.
- ②⑬ P. Cartledge, *Agasilaus and the Crisis of Sparta*, 1987, Baltimore: 305.
- ②⑭ Philochoros 328F151: dynaito d' an kai heteras apo basilēōs eirēnēs, hēn asmenōs prosēkanto hoi Athenaiōi, mnēmoneuein ta nyn ho Dēmostenēs, peri hēs palin ho Philochoros dieilektai, hoti paraplēsiōn autēn tēi tou Lakōnos Antalkidou prosēkanto, apeirēkotes tais xenotrophiais kai ek pany pollou tōi polemōi tetrymenoi, hote kai ton tēs Eirēnēs hōmon hidrysanto.
- ②⑮ Dioid. 15. 38. 1.
- ②⑯ Hamilton, 1991: 191.
- ②⑰ G. L. Cawkwell, "Notes on the Peace of 375/4", *Hist.* 12 (1963) : 90-94
- ②⑱ アンタルキダスに触れつつながら、スパルタが平和への過程をほめたことについて。E. David, *Sparta between Empire and Revolution (404-243 B.C.) : Internal Problems and their Impact on Contemporary Greek Consciousness*, Salem, 1986: 38f. キーワードは平和を第三の党派アンタルキダス派の共同の結果である。D. G. Rice, "Why Sparta Failed" (Ph.D. diss. Yale Univ., 1971) : 146; Hamilton, 1991: 194. n.43-44
- ②⑲ アンタルキダスがイニシアティブを握ったがアゲーシラーオスがアンタルキダスに協力したと考えている。
- ②⑳ Plut. *Pelop.* 30.
- ㉑ Xen. *Hell.* 5. 1. 6.
- ㉒ Plut. *Artax.* 22.
- ③⑥ Xen. *Hell.* 5. 1. 6, 4. 65-66.
- ③⑦ Dioid. 15. 38. 3.
- ③⑧ Plut. *Ages.* 27. 6-28.4; *Nepos. Epam.* 6. 4. cf. Dioid. 15. 50. 4.
- ③⑨ S. Lauffer, "Die Diodorusdublette XV 38 = 50 über die Friedensschlüsse zu Sparta 374 und 371 v. Chr.", *Hist.* 8 (1959) : 315 n. 1; Ryder, 1965: 60, 124; P. J. Stylianou, *A Historical Commentary on Diodorus Siculus Book 15*, Oxford, 1998: 321-3.
- ④⑩ Dem. 49. 14, 21, 48f. ほかの箇所での議論はボイオータイア艦隊がテマキネス艦隊と合流して行動を共にしたことを前提として、*IG II²* 1607 1.49 (Thēbailioi), 1.155 (Thēbaioi) 碑文はテーバイを同盟国としてリストに挙げている。この碑文は一行目冒頭部からアステイオスのマルコムの年、即ち前三七三〇二年度のものとされる。
- ④⑪ Isoc. 14. 37.
- ④⑫ Cf. Hamilton, 1991: 191f. ハミルトンはテーバイが抵抗をやめて平和条約を調停したと考えている。
- ④⑬ Stylianou, 1998: 323.
- ④⑭ R. Sealey, "Callistratos of Aphidna and his Contemporaries", *Hist.* 5 (1956) : 189ff.
- ④⑮ Xen. *Hell.* 6. 3. 19.
- ④⑯ Xen. *Hell.* 5. 1. 32.
- ④⑰ Ibid.
- ④⑱ Thuc. 5. 26. 2, 32. 5. cf. 32. 6.
- ④⑲ Thuc. 5. 30. 2 (コリントス及び平和条約を承認しなかったペロポネソス諸国), 31. 1 (ヘーリス), 32. 7 (コリントス), cf. 29. 1 (ペンティネイア)。
- ④⑳ Thuc. 5. 30. 1 : スパルタはコリントスに対してアルゴスとの同盟締結がペロポネソス同盟条約の誓約違反であると指摘した上で kai edē adikein hoti ou dechontai tas Athēnaion spondas (アテーナイ人との条約誓約を受け入れていないので既に「ペロポネソス同盟条約の・中井補足」誓約を侵犯している)と指摘しているが、ペロポネソス同盟からコリントスを除名するとは述べていない。32.6 : たとえ平和条約をコリ

ントスが誓約していなくてもコリントスの地位についてのアテーナイ側の認識は次のような回答に如実に示されている。 *all' apekrinanto hoi Athēnaioi Korinthiois einai spondas, eiper Lakedaimonion eisi xymnachoï* (もし彼らが本当にスパルタ人の同盟者であるなら、「コリントスは：中井補足」条約誓約者であるとコリントス人に対して「コリントス人が申し入れた十日毎に更新される休戦協定を：中井補足」拒否したのであった)。その結果^{32.7}：コリントスはトゥッキュデイスが *Korinthiois de anakôché aspondos en pros Athēnaious* (コリントス人に関しては誓約を交わしてはいないがアテーナイ人との条約当事者だつたである) と指摘する状況に置かれることとなったのである。

- ⑮ Thuc. 5. 30. 2.
 ⑯ IG II² 43=Tod II 123.
 ⑰ IG II² 97=Tod II 127.
 ⑱ IG II² 96=Tod II 126.
 ⑳ Rhodes & Osborne, 2003: n.29.
 ㉑ 前野弘志『アッティカの碑文文化——政治・宗教・国家——』、広島大学出版会(2007年)：285。
 ㉒ Ryder, 1965: 60, n.2. ライターは前三七三／二年の同盟総会をテーバイが議長として主催したことを指摘している。
 ㉓ Diod. 15. 45.2
 ㉔ C. Tuplin, *The Failings of Empire: A Reading of Xenophon*

Hellenica 2.3.11-7.5.27, Historia Einzel-schriften 76, Stuttgart, 1993: 131. タプリンはサキユントス人亡命者上陸の件についてスパルタがアテーナイに抗議したと^{32.7}Diod. 15. 45. 5の記事を否定し、スパルタは亡命者上陸を直ちに *casus belli* にしたと論じる。しかしこれは極端に関連事件を省略しているクセノフォンの記述を基礎にしており、受け入れることは出来ない。David, 1986: 39. テーヴィッドはケルキュラ遠征をクレオンプロトス派の反アテーナイ政策の結果と評価する。

- ⑳ Dem. 49. 6: *epi Sôkratidou gar archontos mounichiónos ménos mellôn ekplein ton hysteron ekploun Timotheos houtosi, peri anagôgên edê ô n en tói Peiraiei* (とうとうのはソークラテイダスがアルコンの年のムーニキオーンの月に船出のために既にペイライエウスにいたこのティモテオスが次の出航にまさに船出しようとしていた時に)。
 ㉑ Cawkwell, 1963: 84ff; Ryder, 1965: 61 (崩壊は前三七三年で、平和は一年半続いた)；V. J. Gray, "The Years 375 to 371 BC: A Case Study in the Reliability of Diodorus Siculus and Xenophon", *CQ*, n.s.30 (1980) : 308 ; Tuplin, 1993: 131.
 ㉒ Rhodes & Osborne, 2003: n.24. David, 1986: 38. テーヴィッドはケルキュラは平和締結以前に海上同盟に参加したと言っ。

(同志社大学教授)